

1992年度／平成4年度（平成4年4月～平成5年3月）



役員

部長：田村 茂
師範：岡野 功、清水 直臣、安藤 勝英
総監督：成毛 秀臣
監督：清水 正敬
主将：高柳 雅矢
主務：折井 陽太
副将：清水 健
体育会常任委員：高柳 雅矢、加納 幸喜
副務：本多 諭、河津 雅宣
新人監督：唐木 敏行
日吉高コーチ：秋山 康元
志木高コーチ：大門 英明
普通部コーチ：酒井 茂之
中等部コーチ：本多 諭
幼稚舎コーチ：河津 雅宣
合宿所主務：清水 健
合宿所副務：加納 幸喜、徳永 宏規

我が心の柔道部

折井 陽太

塾体育会柔道部125周年、心よりお慶び申し上げ度い。

塾高以来7年間塾柔道部にお世話になり、卒業し社会に出て早や9年の歳月が流れた。単純に年月という意味では社会に出てからの方が塾柔道部での年月よりも長いことになる。然し、今改めて振り返ってみると、いまの自分自身の人生における基本軸の様なものの大半は塾柔道部を通じ学び、吸収させてもらったものであると思う。かなり前に新渡戸稻造の「武士道」という本を読んだ。その本には、日本において古来より大切なとして代々受け継がれてきたものは「勇、仁、礼、品、誠」であり、最も尊ばれるべきものであるという様なことが書かれており、うる覚え乍ら、妙に納得したのを覚えている。そしてこれらのキーワードのうち、ほんの僅かでも自分に備わっているとすれば、それは柔道部での経験を通じて学ばせてもらったものであると思う。それは例えば柔道における礼儀であり、たとえ大きな相手であっても臆せずに相手に向かっていく勇気であり、塾並びに柔道部の長い歴史そのものから少しづつ感じとった品格、こつこつと努力する誠実さ、である。私の人生に幾つものプラスの要因をもたらしてくれたと感じる塾柔道部に改めて心から感謝をしたい。

柔道部時代の思い出は楽しい思い出、辛い思い出、数え上げたらきりが無いが、未だにたびたび強烈に思い出すのは流通経済大学での合宿である。確か当時は毎月1回 1泊2日、夏には約1週

間 岡野功先生の流通経済大学に遠征し、合宿をしていた。塾高柔道部時代から大学柔道部の先輩からその過酷さは聞いていたが、それはそれは強烈だった。強豪ぞろいの流通経済大学の学生相手に寝技・立技の乱取りのみが、4時間とか5時間続いた。立っては投げられを猛暑の中続けていると半分夢心地になり、最終的には辛いという気持ちも無くなる程だった。練習後誰と乱取りしたかを思い出せない様なこともあった。後にも先にも精神とか身体があの様な感じになったことは無いと思う。夏合宿の最終日の練習が終わり道場を後にし、ふらふらになって宿舎迄辿りつくと毎回同期3人で抱き合って心底喜んだことを憶えている。どうにか無事に乗り切れたという安心感、開放感で、茨城から東京迄の車での帰途は本当に楽しかった。社会に出てからもたまには辛いことや苦しいことがある。そんな時いつも「つらいってあの合宿程じゃない、どうにか乗り切れる。」という思いが私に勇気を与えてくれている。

拙文ながら、以上が私の塾柔道部での思い出、柔道部に対する感謝の気持ちである。また、この場を借りて125周年記念事業にあたり、多大なる労力を費やし準備を進められた諸先輩・後輩の方々、日頃塾柔道部の為に様々な形で寄与されている皆様に心より敬意を表し、また、御礼を申し上げ度い。

試合記録

■第11回 東京学生柔道体重別選手権大会 平成4年5月24日 日本武道館

-60kg級	1回戦	河津 雅宣	2年	○	一本背負い		藤本貴之	上智大
	2回戦	河津 雅宣	2年		一本背負い	○	関根博未	日体大
-65kg級	1回戦	酒井 茂之	3年		巴投げ	○	宮本秀樹	順天堂大
	1回戦	高柳 雅矢	4年		継四方固め	○	稻又隆洋	国士館大
	1回戦	高柳 依正	3年	○	大外刈り		長野浩三	工学院大
	2回戦	高柳 依正	3年	○	一本背負い		堂本和宏	東工大
	3回戦	高柳 依正	3年	≡	内股		根岸豊	日大
-71kg級	1回戦	徳永 宏規	2年		背負投げ	⊖	浅川貴史	日体大
	1回戦	清水 健	4年	不戦勝	棄権		中条仁人	玉川大
	2回戦	清水 健	4年		内股	○	井口孝行	大正大
	1回戦	大門 英明	3年		内股	○	境堀智裕	東大
	1回戦	折井 陽太	4年		大外刈り	≡	原義男	帝京大
-78kg級	1回戦	唐木 敏行	3年	○	大外刈り		谷和夫	一橋大
	2回戦	唐木 敏行	3年		すくい投げ	≡	黒川智之	東洋大
	1回戦	伊藤 肇	1年	○	大外刈り		西郷一夫	芝浦工大
	2回戦	伊藤 肇	1年	○	大内刈り		中里光男	玉川大
	3回戦	伊藤 肇	1年		上四方固め	○	尾辻大輔	東洋大
	1回戦	本多 諭	3年	○	内股		小宮靖貴	東工大
	2回戦	本多 諭	3年	○	内股		渋谷政和	成蹊大
	3回戦	本多 諭	3年		内股	○	知名石雄一	中央大
-86kg級	1回戦	友田 雄輔	3年		すくい投げ	○	正田竜一	日体大
-95kg級	1回戦	秋山 康元	2年		内股すかし	○	黒住健二	日大
95kg級	1回戦	加納 幸喜	3年		内股	⊖	窪田茂	東海大

■第41回 東京学生柔道優勝大会 平成4年9月6日 日本武道館

1回戦	本 塾	5	-	1	立正大学
	伊藤 肇	1年	引分け		重 石
	加納 幸喜	3年	○	岡 村	
	高柳 依正	3年	○	松 野	
	秋山 康元	2年	○	田 頭	
	友田 友輔	3年	裏投げ	○	新 間
	本多 諭	3年	合せ技		西 川
	徳永 宏規	2年	○	大 金	
	本 塾	1	-	6	大東文化大学
	高柳 依正	3年	腕絡み	○	福 地
	友田 友輔	3年	合せ技	○	小野寺
	秋山 康元	2年	内股	○	深井智隆
	加納 幸喜	3年	○	安 田	
	伊藤 肇	1年	合せ技	○	芦 谷
	徳永 宏規	2年	払腰	○	先 山
	遠藤 励	1年	払腰	○	佐 藤

■第44回 早慶対抗柔道戦 平成4年10月11日 早稲田大学柔道場

本 塾	-	○	早稲田大学	7人残し
				優秀選手：加納幸喜、唐木敏行、友田雄輔
徳永 宏規	2年	≡	注意	李
徳永 宏規	2年		袖釣込み腰	関口拓也
日高 敦弘			体落し	関口拓也
秋山 康元	2年		引分け	関口拓也
折井 陽太	4年		袈裟固め	奈良剛匡

永田 靖之		返し技	○	奈良剛匡
伊藤 肇	1年	引分け		奈良剛匡
大沢 滋久	1年	返し技	○	古谷野栄一
清水 健	4年	払腰	○	古谷野栄一
友田 雄輔	3年	内股		古谷野栄一
友田 雄輔	3年	横四方固め		平野盛一
友田 雄輔	3年	内股すかし	○	臼井紀之
興津 圭一	3年	内股	○	臼井紀之
遠藤 励	1年	内股	○	臼井紀之
堀 有	1年	内股	○	臼井紀之
酒井 茂之	3年	三角絞り		臼井紀之
酒井 茂之	3年	大外刈り	○	浅野基彥
本多 諭	3年	引分け		浅野基彥
大門 英明	3年	内股	○	漆畠剛司
河津 雅宣	2年	合せ技	○	漆畠剛司
加納 幸喜	3年	小外刈り		漆畠剛司
加納 幸喜	3年	払腰		春木健
加納 幸喜	3年	引分け		藤賀章夫
高柳 依正	3年	引分け		橋本裕司
唐木 敏行	3年	引分け		寺師裕二
唐木 敏行	3年	引分け		川合孝弘
高柳 雅矢	4年	合せ技	○	鈴木智昌
				志 田
				大 石
				三 澤
				佐 藤
				石 川
				定 松

■第34回 東京学生柔道二部優勝大会 平成4年11月1日 警視庁武道館

1回戦	シード				
2回戦	本塾	7	-	0	東京工業大
3回戦	本塾	4	-	1	学習院大
準決勝	本塾	3	-	4	早稲田大

綱町武道館完成

会員諸兄の寄付などによって建設中だった三田綱町武道館が昨年十二月ついに完成、引き渡された。

新武道館は鉄筋二階建て。一階には従来通りの位置で柔、剣道場があり、二階は半屋外の弓道場となっている。

体育館風の外見は真新しく堂々としており、綱町グラウンド全体の雰囲気も一変させた。柔道場の以前の入口はなくなり、風呂場のあった場所が武道館の玄関となっている。日照権の関係から、一階は半地下で、玄関から階段を下って右が柔道場、左が剣道場。弓道場には建物奥の外階段を上がって入る。

新柔道場は天井が高く、照明も明るいため、広々として開放的な感じだ。正面には福沢先生の掛け軸が下げられ、その上には鎌田元塾長の柔道部の記がかけられている。

弓道場の正面にもうひとつかかっていた東郷平八郎の「武勇」は武道館の入口に移動したが、これが剣道部からも「武道館の顔になる」と大変好評だ。

一月六日からは恒例の寒稽古が十日間、行われた。三田での寒稽古は二年ぶり。やはり本来の場所とあって参加者が多い上に、道場の密閉性が高く暖かいため、稽古中は熱氣があふれんばかりだった。

最終日には幼稚舎生の紅白戦、普中戦、塾高一志木高戦に引き続き、しるこ会が開かれた。前述したように道場内が過ごしやすいため、会は例年にも増して盛り上がった。

続く十六日には石川塾長らをお招きして柔剣弓の三部合同の竣工披露が行われた。あいにくと雨模様の寒い一日だったが、新道場を見ようと多くのOBが詰めかけた。中等部の体育館に場所を移してのパーティーも盛会で、羽鳥会長の閉会のあいさつまで、にぎやかな話し声が絶えることがなかった。

慶應義塾綱町武道館竣工披露次第

平成5年1月16日（土）

PM 0:00 受付開始（於 武道館）

（自由に館内を御覧頂く）

PM 0:50 一同着席

PM 1:00 式 典（柔道場）

挨 拶 柔道部長 田村 茂君

式 辞 塾 長 石川 忠雄君

挨 拶 三田体育会長 山本 恵造君

PM 1:45 演武・日本剣道形（剣道場）

打太刀 教士七段 山本 恵造君

仕太刀 教士七段 田口善三郎君

礼射・臺目（弓道場）

弓馬術礼法 小笠原教場第31世宗家 小笠原清忠君

PM 2:10 式典・演武終了

PM 2:30 祝 宴（於 中等部）

挨 拶 常任理事 遠岡 昭君

挨 拶 体育会理事 阪埜 光男君

祝 辞 安藤建設(株)社長 長澤 光一殿

乾 杯 中等部長 小田 卓爾君

懇 談

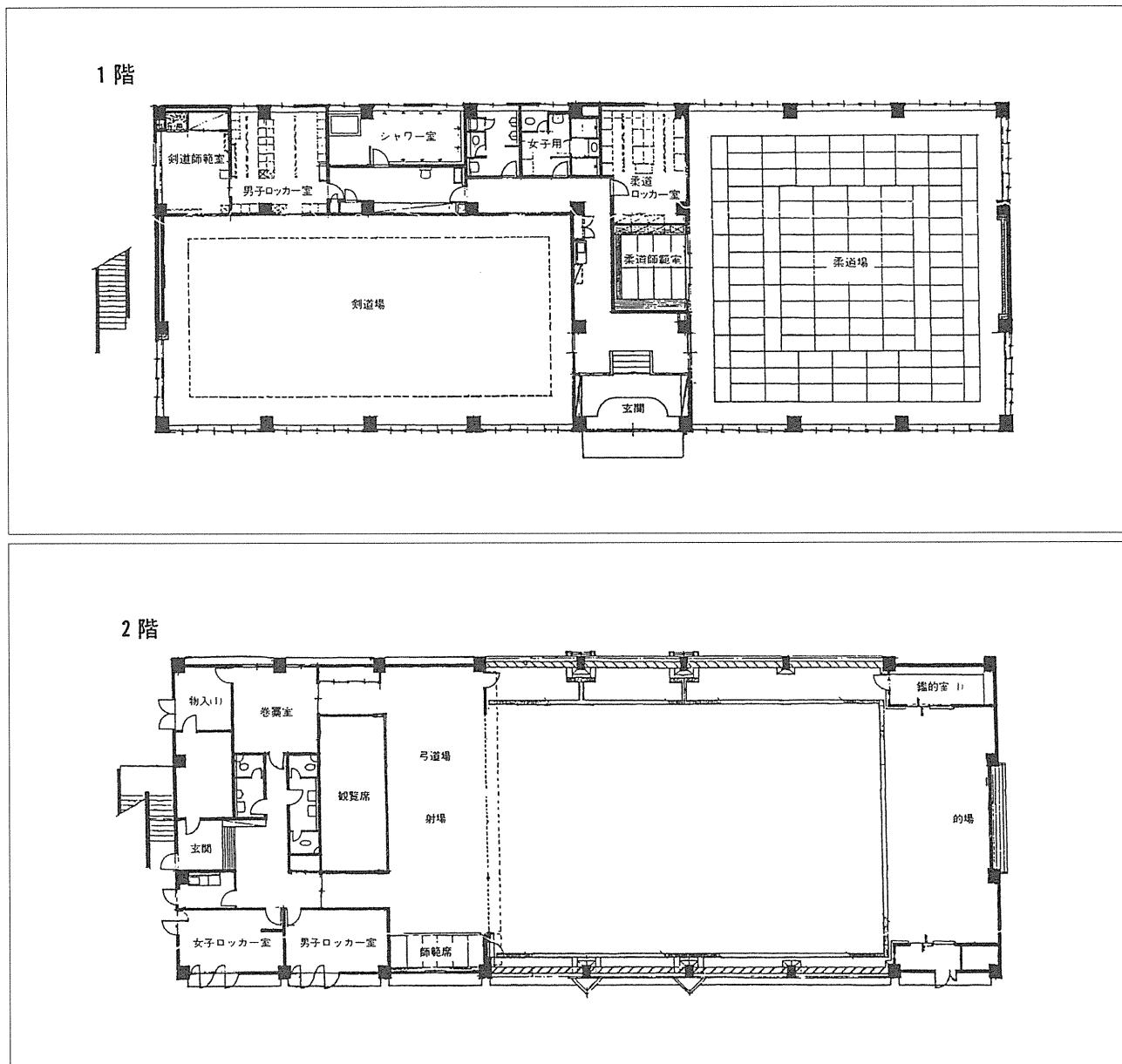
塾歌齊唱

PM 4:00 閉会の辞 三田柔友会長 羽鳥 輝久君

石川塾長式辭要旨

この新しい道場が出来る前、ここには随分古い、しかし伝統のある道場がありました。そこでは多くの学生諸君が青春を燃焼させました。その思い出があの道場には詰まっていました。建物はただ建物であるわけではありません。新しい道場も古い道場と同じように、社会に貢献できる人材を作る役に立ってほしいし、卒業後に思い出すようになってほしいと念じます。

見取り図



慶應義塾（三田）綱町武道館データ

敷地番地 東京都港区三田 2 丁目 2 番地 24号

構 造 鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造

敷地面積 13,312.6108m²

延床面積 1,204.99m²

柔道場・床面積 299.25m²

剣道場・床面積 265.62m²

弓道場・床面積 622.61m²

最高高さ 8.90m

柔友会報63号より

綱町武道館道場開き

目覚ましとともに、カーテンを開ける。雲一つない快晴！ やった！ 幼い頃遠足の前日からの祈る気持ちが通じた時の様な、久々に味わったこの感覚！ 昨年六月実行委員としての指名を受けてから、約九ヶ月の間の努力の結果が今日の一日に全て集約されると思うと、なおさらのことである。あとは多くの来場者を迎えて一日を楽しく過ごしてもらえばと祈るのみ……

新道場の規模・設備の概要については、前柔友会報等で、既にご承知の事と思うので省かせていただくとして、ここでは、道場開きに至るまでの分科会の活動の一部をご披露したいと思います。

柔友会委員会の下部組織としての新道場分科会の大きな役目は、(1)新道場内の備品、名札等の一切の準備、(2)三月二十一日道場開きの企画・実行の二つでした。

そのために当初は数名だった分科会のメンバーも打ち合わせを重ねる毎に増えてゆき、最終的には学生、若手柔友会会員合わせて約十五名の協力を得て、運営をしてきました。

まずは新道場の整備……旧道場時代のものへの未練を断ち切り、新道場にふさわしい備品類を、限られた予算の枠内で整備するかが一番の苦労でした。思い出の多い四角い火鉢、寒稽古の表彰式に使った大きなテーブル等……これは残す事は出来ない。一方、正面の額、掛け軸……これは由緒あるものとして何とか掲げる場所を確保しなくてはならない。道場での記念写真に必ずてくる三色の垂れ幕……今回を機会に新たに作って残そう。その様な中で最大の仕事は名札の製作と掲示の方法でした。八〇〇余名に上る柔友会員、幼稚舎から大学までの現役が約一五〇名、各部長、師範の先生等すべてリストアップし、どのような区分で並べるか、かなり議論をしてきました。特に物故者の名前をどれだけ掘り起こせるかがポイントでした。結果として、製作する名札の数が約一二〇〇枚にもなりましたが、何とか道場開きまでに間に合わせることができ、当日会員の方々の話題に上っていた事は大きな喜びでした。

つぎに道場開きの企画・実行……セレモニーは厳粛に行うとして、その後の記念行事と、祝宴を如何に盛り上げるかが大きなテーマで、諸先輩のご意見・協力も戴きながら、検討を進めてきました。中でも記念行事には古賀選手を招くことができ、学生特に幼稚舎、普通部、中等部の生徒にとっては、更に夢を膨らませるきっかけとなってくれればと、期待するところあります。祝宴については、限られたメンバーで準備することを考えると、とても我々だけでは模擬店を出すことができないとの結論に達し、模擬店は“味の素”の関係に無理を言って一切をお願いした次第です。その他飲物、スナック菓子等は毎度の事ながら、やはり諸先輩方に協力を仰ぎ、十分な量を確保する事ができました。

以上の結果が三月二十一日にご覧戴いた通りです。多少の不備はあったものの晴天に恵まれ、成功裡に全ての行事を終了できたと考えております。ちなみに当日の来場者の数は、約四五〇名でした。

日頃は仕事に追われ、なかなか柔道部の試合や行事に行けず、また最近は柔友会費の納入も振込になってしまったりで、学生とも接する機会が少ない小生ですが、一昨年の旧綱町道場のお別れパーティー、今回の新道場開きと、たまたまお手伝いをさせて戴き学生ともいろいろな形で接してきた中で、感じた事を述べたいと思います。一言で言って、OBと学生との気持ちの隔たりが、昔に比べ大きくなっているのではないかと思いました。最近の（このような言い方をするのは年をとった証拠かも知れませんが……）学生に問題があるのか、OBの側に責任があるのか、それぞれのカルチャーの違いか、答を見い出す事はできませんでしたが何か変わって来ているなと言うのが率直な印象でした。これに腹を立ててばかりいてもしょうがないし、ある面では割り切らなくてはいけないのだろう。こうして少しずつ変わりながらでも塾柔道部の歴史が、受け継がれているのではないだろうか。伝統は作ろうと思って出来るものではないし、結果として作られていくものであろう。いずれにしろ伝統が残って行くための、絆の一つとして道場に掲げた名札が大いに役立つのではないだろうか。今後道場に行かれたら、名札を見て、どれだけの人の顔を思い浮かべる事が出来るか、挑戦してみては如何……

最後に、今回の分科会の活動にメンバーとして、忙しい会社の業務や、稽古・合宿の合間を割いて参加戴いた会員の方々、現役の学生、更に側面からの協力を戴いた諸先輩方に改めて感謝の意を表したいと思います。大変ご苦労さまでした。

柔友会報64号より

